

## 千歳川上流域の釣り解禁とその後

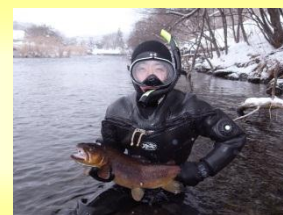
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-03 キーワード: 作成者: 宮本, 幸太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009696">https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009696</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



## 千歳川上流域の釣り解禁とその後

みやもとこうた  
宮本幸太（さけますセンター 千歳事業所）



### はじめに

千歳川上流域である烏柵舞橋から王子製紙千歳川第4発電所までの約1.8 kmは1981年から2010年5月31日まで、北海道内水面漁場管理委員会の指示により魚類の採捕が禁止されていました(2007年5月31日までは全ての水産動物の採捕が禁止)。しかし、委員会指示の施策は恒久的措置では無いなどの理由から、2010年6月に千歳川上流域の委員会指示が解除されることとなりました。これまでのさけますセンターの調査から、千歳川上流域は、サクラマスにとって好適な産卵場、稚魚の生育場および親魚の越夏環境として重要な役割を担っており、自然産卵を由来とする幼稚魚が多く生息していることが確認されています(さけますセンター 2010, 今井ら 2010)。

千歳川のような都市近郊の河川では、遊漁による人為的減耗によって、サクラマスの資源が著しく低下する事例が報告されており(安藤ら 2002, 杉若 1992), さけますセンター千歳事業所では、千歳川上流域の釣り解禁によるサクラマス資源の低下を懸念しています。そのため、2010年の解禁当初から千歳川上流域の利用状況を調査することとしました。なお、遊漁調査の対象魚は在来種であるヤマメ(サクラマス幼魚または河川残留型)と、近年釣りの人気対象種となっている外来種のブラウントラウトとしました。

### 解禁後の遊漁利用状況

調査エリアは解禁エリアである第一烏柵舞橋から830 m上流へ向かった区間までとしました(図1)。調査日は6月1日から同年8月10日までの土日を含む57日間とし、午前8時に徒歩による

目視調査を行い、当区間を利用する釣り人の計数を行いました。なお、釣り人は中村・飯田(2009)を参考に、所持している竿やリール(糸巻き機)の形状から餌釣り・ルアー釣り・フライ(毛ばり)釣りの3種類のカテゴリーに分けて計数を行いました。

その結果、餌釣りが41人、ルアー釣りが34人、フライ釣りが22人と、餌釣りをする人が最も多く確認されました(図2)。このように解禁した区間は、わずかな距離にもかかわらず多くの釣り人に利用されたことが解ります。しかも調査結果は午前8時時点のものであるため、実際にはもっと多くの釣り人に利用されていたことは容易に考えられます。溪流魚の場合、釣れた魚を持ち帰ることで、わずかな人数の釣り人でも資源が急激に減少することが報告されており(山本ら 2001), 解禁となった千歳川においても何らかのルール作りが必要だと考えられます。

### 釣獲後の魚の利用について

徒歩による目視調査の際、魚籠(釣り上げた魚を持ち帰るための入れ物)を携行していた釣り人15名を対象に魚の利用についての聞き取り調査を行ったところ、ヤマメについては全員が「食べる」と回答したのに対し、ブラウントラウトについては図3のように「食べない」との回答が7人、「大型魚なら食べる」と回答したのが3人、「食べる」と回答したのが5人でした。なお、「食べない」と回答した釣り人にその理由を聞き取りしたところ、「赤い斑点が気持ち悪いから」や「美味しくないから」という回答が得られました。北海道ではヤマメは新仔釣りの対象や甘露煮など、ひとつの文化として古くから親しまれています。

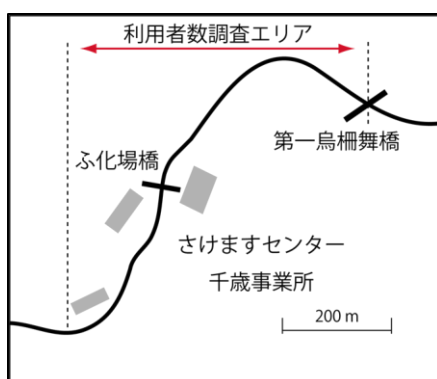


図1. 調査エリア。

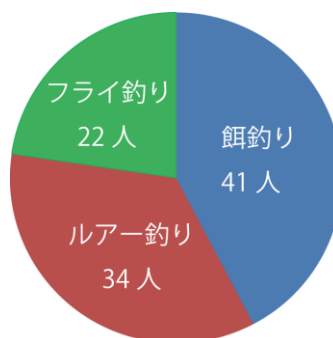


図2. 利用者数調査結果。

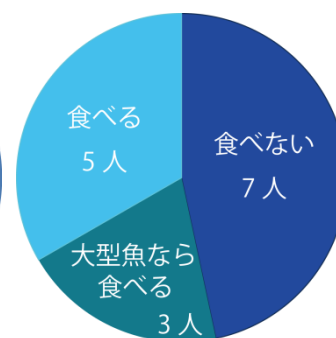


図3. ブラウントラウトについての聞き取り調査結果。

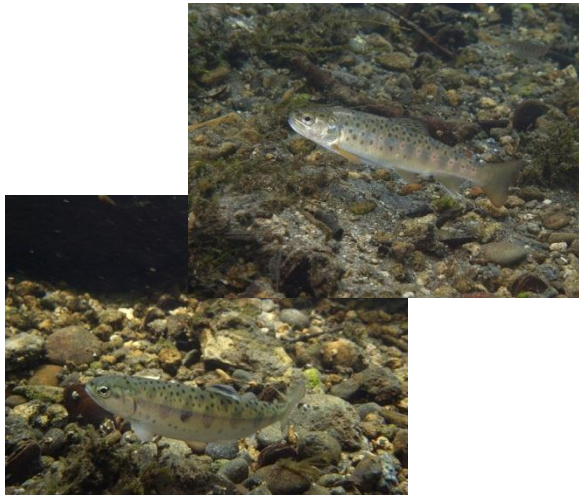


写真. 千歳川上流域に生息するブラウントラウト(右上)とサクラマス(左下)の幼魚.

一方、ブラウントラウトについては、この水系では20年ほど前から現れ始めている魚であり(鷹見ら 2002)、その文化についてはまだまだ日が浅いことも、このような回答になった1つの要因かもしれません。また、この結果は、サクラマスとブラウントラウトでは漁獲圧が異なることを示唆しています。ブラウントラウトなどの外来種は、一般的に種間関係(捕食・競争・交雑・病原体の伝播など)を通して、在来種の個体数を減少させることが知られています。実際、千歳川でも支流の紋別川やママチ川で、種間競争や交雑を通じて、生息魚種が在来種のアメマスからブラウントラウトへ置き換わったとされています(Kitano et al. 2009; Hasegawa & Maekawa 2009; Hasegawa et al. in prep.)。そのため、今後もサクラマスに対してより強い漁獲圧が加わってゆくと、これまでサクラマスが利用していた空間にブラウントラウトが侵入し、置換を助長することも考えられます。そのため、千歳川に生息するこの2魚種の関係について、注意深く観察する必要があると考えられます。

### おわりに

サクラマス資源の枯渇や外来種問題は、古くからその場を利用してきた地域住民の娯楽や生活にまで影響を及ぼすものと考えられます。環境倫理学者であるアンドリュー・ライトは「都市の環境倫理」の諸論考(Light 2001, 2003)の中で、都市やその近郊の自然の維持管理や復元プロジェクトに市民が参加することによって、環境保全の動機が生まれ、環境に対する責任が芽生えるとしています。また、このような参加に基づく責任の自覚は、実行力のある環境保全を考える上で重要なものであるとも述べています。千歳川上流域においても委員会指示の解除を受けて、2010年5月27

日に、当区域の健全な自然環境および動植物の保護対策を考える場として、千歳市民団体による「千歳川上流域保護対策協議会」が設立されています。地域住民と研究機関とが都市近郊河川である千歳川の問題点を一体となって考え、そして行動してゆくことで、科学的合理性の追求だけでは無く、地域の実情に合わせた現実的かつ合理的な対策が千歳川上流域に講じられてゆくことを今後期待します。

### 引用文献

- さけますセンター. 千歳川上流域におけるサクラマスの自然再生産～千歳川上流域の「今」と「これから」を考える. さけますセンター, 2010.5.28, <http://salmon.fra.affrc.go.jp/zousyoku/chitose/chitose.htm>
- 今井 智・大本謙一・高橋昌也・宮本幸太・小野郁夫・大熊一正. 2010. 北海道千歳川に遡上するサクラマス産卵親魚の由来と移動様式. 日本水産学会誌, 76: 652-657.
- 安藤大成・宮腰靖之・竹内勝巳・永田光博・佐藤孝弘・柳井清治・北田修一. 2002. 都市近郊の河川におけるサクラマス幼魚の遊漁による釣獲尾数の推定. 日本水産学会誌, 68: 52-60.
- 杉若圭一. 1992. 放流サクラマス稚魚の生残率と遊漁の関係. 魚と水, 29: 27-31.
- 中村智幸・飯田 遥. 2009. 守る・増やす 溪流魚イワナとヤマメの保全・増殖・釣り場作り. 社団法人 農村漁村文化協会, 東京. pp.19-21.
- 山本聡・小原昌和・河野成美・川之辺素一・茂木昌行. 2001. 野生イワナの毛鉤釣りによる Catch-and-Release後のCPUEと生息尾数の変化. 水産増殖, 49: 425-429.
- 鷹見達也・吉原拓志・青山智哉・桑原連. 2002. 千歳川支流におけるアメマスおよびブラウントラウトの分布と食性. 魚と水, 38: 23-32.
- Kitano, S., K. Hasegawa, and K. Maekawa. 2009. Evidence for interspecific hybridization between native white-spotted charr and nonnative brown trout on Hokkaido Island, Japan. *J. Fish Biol.*, 74: 467-473.
- Hasegawa, K. and K. Maekawa. 2009. Role of visual barriers on mitigation of interspecific interference competition between native and nonnative salmonids. *Can. J. Zool.*, 87: 781-786.
- Light, A. 2001. The urban blind spot in environmental ethics. In Mathew, H. ed., *political Theory and the Environment: A Reassessment*, Frank Cass Publishers, London, 7-35 pp.
- Light, A. 2003. Urban ecological citizenship. *J. Soc. Philos.*, 34: 44-63.